
夏の淵の底で

ぼーず平野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の淵の底で

【コード】

N0316Q

【作者名】

ぼーず平野

【あらすじ】

僕がなぜ夏を嫌いになったのか。遠い子供のころのセツオ君との思い出を語る。意外な結末が・・・。

また夏がきた。この場所でまた夏を迎えてしまった。僕は夏が嫌いだ。濃密な空気が肺のなかにまとわりつく感じもいやだし、加減を知らない熱気が、頭の芯を煮え立たせるのもいやだ。夏の熱気のおかげで、僕は生きることがすら嫌いになった。

でも、なにも最初から夏が嫌いなわけじゃないのだ。

当時、僕は小学六年生、セツオ君は普通なら中学一年生のはずだった。普通ならというのは、セツオ君は養護学校に通っていたからだ。『養護学校』という一種特殊な響きは、僕にはあまり理解できないものだった。セツオ君は僕にとって養護学校生でも何学校生でもない、唯一の子分であり、遊び相手だった。

夏休みになると、セツオ君は毎日のようにブリキのバケツをもつて近所の空き地に現れた。それもラジオ体操が終わって朝ごはんを済ませたくらいの、七時半ごろと決まっていた。ブリキのバケツのなかには、グローブやらタコ糸やらビー玉やらメンコやら、彼のすてきな持ち物が一式はいつていた。家の窓から、背の高い日に焼けたセツオ君の、ひよろひよろとしたランニングシャツ姿が見えると、僕はいても立つてもいられなくなった。ところがいま面白いことに、僕は母親から大嫌いな宿題を命じられ、算数、国語、理科、社会のドリルがページずつ終わらないと遊びに行つてはいけなかった。

そこで、いやでしかたない宿題を早く終わらせるために、ズルをやった。母親が切り取ったドリルの解答ページの隠し場所を見つけ、怪しまれないように適当に間違い、適当に時間をかけながら書き写したのだ。

だが母は、僕がセツオ君と遊ぶことを好まないようだった。母の持論はこうだ。

「おかしな子と遊んで、なんかあっても、誰も責任とってくれな

いのよ？」

僕はセツオ君をおかしな子だなんて、まったく思つてなかった。むしろ気が良くて優しい、いいやつだった。そもそも、「なんかあつても」ということの意味がよく分からなかった。べつになにもない。だから僕は母の言うことなどまったく意に介さず、夏休み中、晴れている日にセツオ君と遊ばない日はないくらいだった。セツオ君も僕も、夏が大好きだった。僕たちは僕たち以外のことをなにもかも忘れて、毎日いろいろな遊びをした。

二人きりの野球。これは片方がピッチャーで、もう片方がバッターだ。セツオ君は打撃がへたで、ちつともバットに当てられなかった。対して僕が打つといつても大きな当りで、空き地の柵の向こう側にある土手の手前の草むらまで飛んでいくのだった。そんなときセツオ君は、ボールを探しにいったまま、いつまでも帰つてこないことがあつた。見に行く、たいていは草のなかを這いずりまわつて、窮屈そうなズボンから半分尻を出したまま、一所懸命にボールを探していた。

蝉捕りは、セツオ君の大得意な遊びだった。彼は長い腕を器用に動かして、意外と敏捷に蝉を捕らえた。捕らえると必ず僕に差しだしてくるのだが、実は、僕は蝉が怖くて触れないのだった。だからいつも「おまえにやる」と言つて、全部を彼にもつて帰らせた。

車ごっこは、近所に捨てられていた乳母車に片方が乗つて、片方が非常な勢いで押しながら走るといふだけの遊びだ。この遊びのとき、僕は多く押し役をやつた。乗る役よりも押しほうがだんぜん楽しく、ことに狭い道を駆け抜けていくときや急なカーブを高速で曲がる時など、それこそ操縦のテクニクが要求され、本物のレーサーになつたような気分になれるのだった。

ザリガニ釣りも楽しかった。タコ糸に餌のちくわを括りつけて、池のほとりでぼんやりと待つのだが、セツオ君は、餌にもつてきたちくわをほとんど自分で食べてしまった。だから僕たちは、いつも少ない餌で勝負するしかなかった。それでも糸をゆっくりと引き上

げたときに、アメリカザリガニの真つ赤な爪が見えてくると心が躍った。

セツオ君はそもそも表情の変化が乏しく、なにをしても薄笑いのままでしかなかった。車ごっこで、乳母車に乗せられたまま急カーブを曲がりきれずにひっくり返ってしまったときでも、昆虫採集で林のなかに入ってアシナガ蜂に刺されたときでも、フナ釣りにいつてフナじゃなくて大きなナマズがかかったときでも、いつも薄笑いのままだった。

「セツウ」……と、僕は彼のことをそう呼んだ。「セツウは、嬉しかったり、怖かったり、痛かったりしないのかあ？」

彼は僕のそういう問いかけにさえも、ニヤニヤと薄笑いをくずさなかった。僕はおよそ彼が言葉を発しているところを見たことがなかった。なにを聞いても、なにを話しかけても、特に返事をするわけではなく、野球のボールを真上へ放り投げては受ける所作をくり返したり、ただ薄笑いのままじっとしていたり、ときには片足で立って両手を広げ、ヤジロベエのようにバランスを保ったり、その状態で手だけヒラヒラと動かすこともあった。

セツオ君の通う養護学校は、僕の小学校の敷地のとなりに建っていて、高さ一メートルくらいの金網の柵で仕切られているだけだった。となりの校庭を覗くことは禁止されていたが、うまく休み時間さえ合えば、小学生たちは運動をしている彼らの様子を、金網に貼りついて見ていたものだ。僕はそういうことを好まなかったから、休み時間には教室でエンピツを削ったり、女の子と話しているほうが良かった。

そんななかで、ときどきはセツオ君がぎこちなく体操をする姿もあっただろう。セツオ君はひよろひよろと長細く、丸刈りであごも長く伸びていたため、特に目立ったようだ。単に『アゴ』というだけの、つまらないあだ名を、僕の同級生たちはつけていた。

「おまえ、アゴと仲がいいらしいな」

夏休みの登校日に、僕はひとりの同級生からそう言われた。この

同級生は柔道を習っている体格のいいやつで、日ごろからそれを自慢にしていたし、ちよつとしたことで暴力をふるった。

「あんなアゴと遊んでるから、バ力がうつつて頭がスイカの音になつてるぞ」

そう言いながら同級生は、僕の頭を涙がでるくらい何度も強く叩いて、笑った。これを見ていたほかの同級生たちも、やはり一様に笑った。「スイカ頭やーい」と、みんな僕を指さして囃した。

だから僕は、同級生の男子が嫌いだっただ。あんなつまらないやつらと遊ぶくらいなら、どこか遠いところへ引越しをして、もっと知らない子と仲良くなりたいたいと思った。

「おまえ、おれと遊んで楽しいか？ おれは楽しいけど」

遊びつかれた帰り道に並んで歩きながら、僕はセツオ君にときどきそんな話をするこゝろがあつた。

「もしおれが引つ越して遊べなくなつたら、おまえはどうする？」

もちろんセツオ君の返事はなにもなかつた。彼は薄笑いのまま、僕の話の聞いているのかいないのか、理解しているのかすら分からなかつた。そんなとき僕は、たまらなく悲しい気持ちになって、家に帰ってから母のひざで泣いた。心配する母の優しい声を聞いても、涙のわけは僕だけの秘密だつた。

ある日の午後、それは突然のひどい雷雨が一時間ほど続いたあとだつたが、今まで以上に強い太陽の日差しに、めまいがするほどだつた。後年になってから当日の氣象記録を見ると、やはりその日の気温の上がりかたは異常だつたようだ。

僕は、空き地の土管のなかに座りこんだままカナブンを相手に遊んでいたセツオ君をさそつて、二人野球をしようと言つた。その前日の夜には、甲子園の決勝試合の名場面が繰りかえしテレビで放送されていたから、その影響だつたのだと思う。

しかしセツオ君はその日に限つて僕の言いつけを守りたくないようだつた。今思うと、軽い熱射病だつたのかもしれない。彼は緑色

のカナブンをエンジ色のシャツにとまらせたまま、なかなか腰をあげようとはしなかった。それでも僕が、野球をしないならもう遊んでやらないぞと言うと、やっとグローブとバットを手にした。

その日はなにもかもが狂っていたとしか言いようがない。誰にでもそういう日が、人生のなかで一日や二日はあるんだと思う。

野球をはじめてまだ五分ほどしかたつてないのに、僕の打球はやすやすと空き地の柵を越え、土手を越えて川のほうまで飛んでいつてしまった。ボールがなければ野球は続けられない。土手を越えるなんてことは、かつてなかったことだ。セツオ君は薄笑いながら、しかし少し疲れたような顔でボールを探しにいったまま、長い時間帰ってこなかった。

しかたがないので、僕もいっしょに探すために、土手を降りて川のそばまで行ってみた。川は、さっきの雷雨で水かさが増して、恐ろしい音をたてる奔流になっていた。僕たちは川岸の周辺を、十分ほども探しつづけた。その川岸にびつしりと並んだ背高泡立草の根本を、溢れた泥水が洗って、渦を巻いていた。ボールはそのあいだに挟まっていた。

「セツウ」

僕は目で合図し、いつものように取りにいくよう命じた。

彼は例の薄笑いのまま、やや困った顔をした。どうにも元気がないようだ。

「しかたないなあ」

僕は舌打ちすると、自分の前でいい格好を見せようとする主人がよくするように、ひとつひとつの動作について、ふんぞり返ってもつたいぶって見せた。僕は偉そうにバットとグローブをその場に放り出し、不機嫌極まりない態度で靴を脱ぎ、大袈裟な仕草で靴下をポケットに入れてのしと歩き出した。しかし普通に進めるのは、せいぜい一メートルだった。そこから先はすでに濁流が押し寄せているため、なにも見えず、足元が定かではなかった。

僕は振りかえってセツオ君の顔を見、こんなことはなんでもない

のだと言わんばかりに水の中に足を入れて、さぐりながら二三歩進んだ。するとまだ向こう脛の深さまで届かないうちに、足がかりにした石が浮き上がるような気がしたと思った刹那、転倒して水のなかにからだごと投げだされた。

おそらく僕は、夢中でなにかつかめるものを探したのだと思う。気がつくくと右手で背高泡立草の茎を、何本かしっかりと握っていた。そして僕は強く吐いてのろのろと立ちあがると、拾いあげたボールをセツオ君に差し出し、「おまえが言うこと聞かないから悪いんだぞ」ときびしい口調で言った。

「役立たず！」

僕が彼にこんな怒った調子でものを言ったことは、過去になかったはずだ。僕自身、あとで思い出してみても、なぜこれほど怒ったのかよく分からない。自分が転んだことに対する、照れ隠しの感情があつたのだろうか。それともやはり、夏の暑さが僕を狂わせたのか。

セツオ君は薄笑いのまま、自分の左手にはめたグローブに向かって右手でボールを投げつける仕草をしばらく続けていたが、不意に半ベそになるとそれをやめた。そして、声をたてずに泣きだすと、ボールをさつき落ちていた草の中へ、ポイと放りだした。なにをするのかと見ていると、彼は靴をはいたままで、泣きながらザブザブと泥水に進んでいった。きつと怒られたから、今度は自分でボールをとってみせ、良い子分であることを示したいのだろうと思った。

僕は腰に手を当てて「よし」と言った。

「ちゃんとやって見せるよ」

できるもんかと思った。僕は今までにないほど、ひどく冷徹で無慈悲だった。

セツオ君は僕がはいっていった水際のあたりをのろのろと二三歩進むと、片足で立ってヤジロベエの格好をした。危ないことをすると思った。

「バカ！」

その瞬間、セツオ君は水流にバランスをくずして、前のめりに水へ落ちた。そして、エンジ色のシャツが泥の中で急激に二回転ほどし、五メートルほど下流で引っかかって止まった。

僕は急いで彼のそばへ駆けよった。

意識のある彼は、手近にある草をつかんで這いあがるうとした。セツオ君の目のなかの眸の周囲を、ぐるりと白目が取り囲んで、今まで見たことのないような表情になっていた。その目はほかでもない、僕をしつかりと見ていた。強く訴えかけるような責めるような、今までとは別人の形相に、僕は驚いた。彼は音を立てて激しく水を飲みこみながら、硬直した手を僕のほうへ伸ばしてきた。そして、彼の手がもう少しで僕の足首に届くまでになったとき、僕は今までに見たことのないセツオ君の真剣な目が迫ってくる恐怖でいっぱいになり、突然頭の奥がしびれるような気がした。

「来るな！ 来るな！ 来るな！ 来るな！」

どうにかして彼が消えてくれたらいいと思った。僕は落ちていたバットを拾いあげると、その先で、セツオ君の手の甲や坊主頭をめぐらして、何度も何度も殴りつけた。ほんとうに頭の中でそうしようと思ったのではなく、気がついたらそうになっていたと言っている。鈍い感触が、木製のバットをとおして伝わった。そのときたぶん僕の目には、迫りくるセツオ君の目よりも、もっと恐ろしい色が浮かんでいたに違いない。

今になって考えてみれば、ほんの一瞬のことだった。セツオ君は力尽きて、無言のまま岸を離れていった。増水した川の泥なかを、セツオ君のエンジ色のシャツが鮮やかに見え隠れしながら、急速に遠ざかっていくのが見えた。僕はいそいで土手にのぼって、ずっと下流のほうでエンジ色が水中に消えたのを確認すると、手に持っていたセツオ君のバットやグローブを、厄介者のようにすべて川のかなかへ投げこんだ。

僕にとって幸いなことに、セツオ君を殺したことは誰にも気づかれなかった。翌日に二キロも下流で発見されたセツオ君は、増水中

の事故ということであつた。しかし、たとえ完全犯罪があり得たとしても、犯罪者がみずから墮ちた淵を這いのは、すぐく努力のいることだ。理由はともかくとして、僕のようには、踏み誤つた人間が普通にありまゑに生きていくことは、一般の人たちよりも何十倍も、何百倍もたいへんなことだ。それに引き換え、淵の底に流れるどす黒く汚れたものに、ふたたび手を浸してみたり親しんだりすることは、ひどく簡単なことだ。なんとなくそんな気がする。

僕はそのときから数えてちょうど十五年後の夏、当時婚約していた女性の首をしめ、彼女の家族の住む家に火をつけて五人を殺した。セツオ君のときと同じだ。僕に迫ってくる眼差しが、突然怖くなる。責任ある真剣なことに向き合うのが怖い。関係するすべてがわずらわしい。みんな一度壊してリセットしたい。目のまえから消えてしまえばいいと思う。

裁判官の死刑の宣告を聞いてから七回目の夏を、今こうして拘留所の独房のなかで迎えている。狭く切り取られた窓のそとは、憎らしいほど高くまぶしい。週にたった三回の入浴では、エンピツを持つ手が汗でネバネバして、うまく書きすすめられない。両親はとつくの昔に、二人とも自宅で首をつつた。姉は職場でいじめられて、鉄道に飛び込んだ。判決は婚約者一家を殺したことに對するものだ。このまま処刑されれば、僕が少年時代にセツオ君を殺したことは、誰も知らないままになる。

世間の人たちは僕を極悪人だと思つてゐるだろうし、僕自身も一時はそうなのかも知れないと思つた。でも考えてみれば、僕は世間で普通に暮らしている人たちと比較して、それほど悪い人間ではない。誰でも瞬間的にこうなる芽を秘めていて、それを塗り隠しながら、あるいはそれを騙しながら毎日をうまくやつてゐる。日常に潜む狂気のようなものが、たまたま表面に現れるか現れないか、たったそれだけの違いなんだと思う。巧みに上辺だけを飾つて善良と言われ

ることが、果たしてほんとうに良い人間の証なんだろうか。良い人間、悪い人間とは、いつたいなんだろうと、ずっと考えているけどよく判らないでいる。

単調で飽き飽きする独房の暮らしよりも、早く自分自身をリセットしたい。早く処刑されて、つまらないこの人生から開放されたい。夏の淵の底で考えることは、今、そのことだけだ。死んでいく身に、反省の念も懺悔の気持ちもない。

最後に、おそらくごく普通の死刑囚である僕のがままを容れてくださり、この平凡な作文の公表に尽力頂いた、弁護士小林先生とアントルー出版の赤石さんに多大なる感謝を申し上げて、すべてを終わりたい。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0316q/>

夏の淵の底で

2011年1月17日23時40分発行